

令和5年度幻住庵俳句コンクール 年間優秀賞

第113回～116回

特選句集

◇大津市長賞

石山の石うつくしき良夜かな

大津市別保二

田中 文子

【評】石山寺の石は砕灰石という真珠のような輝きを持つ、明るい月光に照らされた石より一層白く輝いて見えたことだろう。「石うつくしき」と表現しているが反転して澄み渡る空に浮かぶ満月も称賛している。

(撰者 山田 鳴子)

◇大津市市会議長賞

街灯は昭和の色や雪の宿

栗東市中澤二

葛城 巖

【評】旅情を感じる「雪の宿」が印象に残りました。それを超えるものとして「街灯」から昭和時代を懐かしく思い出しました。令和時代と違う言葉の響きがあるからです。虫が集まる夏、雪を映し出す冬、原風景と重なるからです。

(撰者 吉永 幸司)

◇びわ湖大津観光協会会長賞

母背負ふ記憶なかりし啄木忌

草津市若草三

井上 次雄

【評】石川啄木歌集から本歌取。元歌は背負った母の軽さに涙するもので、その感銘は当句作者の脳裏に確と、母を背負った記憶なし、との明確な断定により、啄木歌への感佩は勿論、自ら母への思慕が表われた。

(撰者 馬場 民代)

◇京都新聞賞

生還の父の記憶や昭和の日

大津市石山寺三

小野 寛

【評】昭和の日が巡ってくる、父が戦争から帰ってきた時の子供の記憶が蘇ってくる。生還という言葉からやせ細り極限の状態から帰還した姿を想像させる。戦争の悲惨さと共に反戦への作者の思いが伝わってくる。

(撰者 小林 紀夫)

◇幻住庵保勝会長賞

初蛍夫に越されてしまひけり

大津市光が丘町

大槻 善恵

【評】闇の中を流れる闇。蛍の明滅が暗い川面を照らす。それは人の魂にも似て、死んだ息子の魂かと懸命に追う私を主人が追い越して行った。その主人も二年後に逝った。私の人選の一コマの様に切ない句。

(撰者 志村 宣子)

◇佳作

書いて貸す小さき決意夏あざみ

大津市里一

宮崎 正子

彼岸花片手拝みの野の佛

大津市栄町

森本 和子

一匹のこほろぎ百年の駅舎

大津市柳川一

丸岡 正男

エッシャーの階段登る年の暮れ

大津市国分一

松村 克彦

手術痕撫でてねぎらふ袖湯かな

草津市若草三

井上 次雄

山暮れて山のかたちに山眠る

大津市別保二

田中 文子

見ゆる風聞える風や近松忌

栗東市中澤二

葛城 巖

黄帽子の子ら手をつなぎ春の野辺

摂津市南千里五

河野 善江

うめかおるちゆうしやじょうでいぬがまつ

草津市若草三

よこいにお

春帽子ぬぎ分身のごとく置く

栗東市中澤二

葛城 巖

百年を生きて愉楽の雛の目

大津市別保二

田中 文子

揚げ花火闇をつかんで崩れ落つ

草津市若草三

井上 次雄

スリッパの音の重たき梅雨湿り

高槻市高垣町

四方 よね子

潔く捨ててさみしき衣更

大津市里六

宮崎 正子

満蒙の荒野に果てし墓洗ふ

大津市石山寺三

小野 寛